

新興団地の住環境について

○池田 裕美 大村 道雄 (信州大学)

目的 1998 年に開かれた長野冬季オリンピック・パラリンピックの選手村として注目を浴びた新興団地は、その後改装され、同年 10 月より住民約 900 世帯が一斉入居し、多様な世代・職業・住居形態の居住者が暮らす大型団地となった。本研究では、入居して一年を経た時点で、居住者を対象に①団地及び集合住宅に対する評価、②快適性と室内環境、この二つの観点から、年代別・入居建物別居住者の評価を把握し、問題点を明らかにする。

方法 1999 年 10 月から同年 12 月にかけて、住民 830 人に留置調査法でアンケートを行った。回収状況は有効回答数 223、回収率 26.9%である。分析は、表計算ソフトを用いて単純集計及びクロス集計を行った。

結果 ①団地及び集合住宅における居住者の評価・問題点に関しては、買い物の不便さを訴える居住者が、20代 19.3%、30代 21.5%、40代 47.8%、50代 27.3%、60代 58.3%、70代 77.8%と年齢層が高くなるにつれて多く見られ、また道路や駐車場や広場といった毎日利用するものに対する不満も見られた。②快適性と室内環境に関しては、カビの発生を訴える者 63%、結露について 79.5%と予想以上に多いことが明らかになった。カビの発生を訴えた者の 92.1%が結露についても訴えていることや、発生場所に関しては、カビの発生は北側の部屋・浴場・窓のサッシ、結露は窓のサッシ・北側の部屋・玄関と一部共通点がみられることから、両者の関係が深いことが予測される。また、化学物質汚染に関わる症状を訴えた居住者は、入居当時 48%、現在 18.4% (目がチカチカする、アレルギー症状に関しては 40%を超える) と高く、深刻な問題であることが判明した。